



発行：真宗大谷派 常入寺（富山市東老田787番地）
電話(076)436-0816 Fax(076)436-2766 携帯電話090-3764-3983
発行責任：青井 和成

敬うこととおそれること

私たちは先輩方から「先祖を敬え」という言葉を聞いてきています。そのことにうなづきながら、そして大切なこととして生きてきていますが、でも敬うということはどんなことなのでしょうか。

私たちは恐れることと敬うことを混同しているのではないかと私は思うのです。別の言い方をすれば恐れることと敬うことは全く違うものではないかと私は考えています。私たちは先祖に対して敬うということよりもおそれの気持ちの方が強いのではないだろうか。恐れているから敬うことにしているのではないかでしょうか。

敬う、尊敬するということは頭を下げるのことではなくて、頭が下がることです。自分の行動として頭を下げるのではなく

く、理由もなく、無条件に頭が下がること、絶対的信頼があることを尊敬というのだと私は思います。

私たちはどうでしょうか。先祖に対して絶対的信頼が成り立っているのでしょうか。どちらかといえば祟りをもたらすもととして、災いを運んでくる根元としてみているのではないかでしょうか。そしてそういうことが自分たちのところに起きないために敬う形（法事・墓参り）を一応取っているだけなのではないでしょうか。

先祖は敬わなければならぬのではなく、敬ってしまうものなのです。お念仏が私にとってかけがえのない宝としていただけたとき、念仏を私にまで伝えてくださった尊い方々として敬つていけるものなのです。私が今生きていること、生命を頂いていることがめでたく、有り難いことと頂けたときあらゆる存在に対して一つの間にか尊敬していけるのではないかでしょうか。

強制するものでは決してありません。



あい
愛



「愛」難しい言葉である。

われわれは、愛を絶対・至高のものと考えがちである。

キリストは「汝の隣人を愛せ」と言い、孔子の説いた「仁」もまた愛であり、テレビは「愛は地球を救う」と叫ぶ。しかし、彼らと違って、釈尊は愛は苦だと説き、悟りへの障礙物と教える。

釈尊は、妻をすて、子をすて、家をすて出家の道に身を投じた。それはまた愛を切りすることでもあった。愛は深ければ深いほど、切りする時の苦惱もより強い。その強い苦惱を知っているからこそ釈尊は愛を苦ととらえたとも考えられる。

また愛という言葉自体は本来すばらしい言葉ではあるのだが、われわれ凡夫の愛の裏側には、常に区別の思いが隠れている。わが子を愛する心の裏には、わが子とよその子を区別する心があるように、何かを愛するという心の裏には、別の何かは愛さないという心が潜んでいる。愛国心という言葉が時として危険性をはらむのはこのためでもある。そしてこの区別する心は、すぐに区別したものに対する執着の心を生み出す。この執着を背景に持つ愛は、単なる己の欲望充足のための愛である。

そもそも仏教でいう愛とは、トリシュナーの訳語で、欲望の充足を求める「渴愛」をいう言葉である。こういう凡夫の愛こそが悟りへの障害でもあり、円覚經という經典にいう「輪廻は愛を根本と為す」の愛なのである。輪廻を脱するため、言いかえるなら、解脱のためには障碍となるような愛、釈尊自身こうした凡夫の愛を切りすることによって、より大きな深い愛へ近づこうとしたのかもしれない。

たとえば飢えた獣の前に我が身を投げ出したという、本生譚に語られる愛。けして自己の欲望充足のためではなく、生きとし生けるものに広く等しくそぞがれる絶対平等、無差別の愛、「仏の慈悲」と名づけられたこの愛こそが、釈尊が求めた愛であったのだろう。

また善人のみならず悪人にこそ往生の可能性があると説いたわが親鸞の、その背景にある「愛」も、この愛であったように思われてならない。

2003ねん5がつ1にち

法座の予告

祠堂経会

6月29日(日)より30日(月)まで

布教師 未定



でこ／戸次公明

宗祖親鸞聖人 ご命日の集い

毎月(三月から九月まで)二十八日

午後二時より三時まで